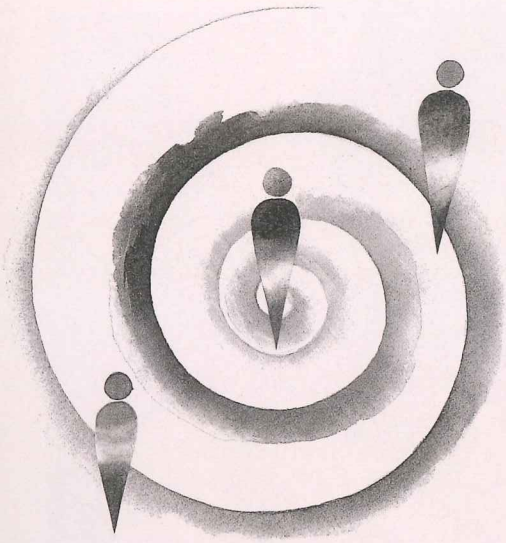
誌上
ケース検討会
58

50代で脳出血を発症した元会社社長への支援



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。（検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました）

●スーパーバイザー

野中　猛（日本福祉大学教授）

●事例提出者

Ｙさん（居宅介護支援事業所・社会福祉士）

●事例の概要

●クライアント

Ｎ氏（59歳・男）

●本人の主訴

自宅で在宅生活を送りたい（身内や知人の介護者が皆いなくなってしまった）。

●親族の要望

本人の思うように生活していけばいいと思う（投げやりな感じで）。

●生活歴

サラリーマンを辞め、独立し会社を興す。妻と２人の子ども（長女と長男）がいたが離婚。その後は内縁の妻とその子どもと３人で暮らしていた。だが、本人が倒れた後家を出て行き、現在はひとり暮らし。

●病歴等

平成14年１月　左被殻脳出血。右片麻痺。失語症。

平成14年３月　リハビリ目的で転院

平成14年８月　退院

平成15年９月　老健入所

平成16年２月　退所

●既往歴

糖尿病、高血圧（内服治療中）

●要介護度　要介護２

●照会経路

退院時（平成14年８月）、病院のケースワーカーからの依頼にて援助開始。

・身体障害者手帳２級

・サービス利用の費用については、限度額を超えてもいいとのこと。会社の経理担当の方から、「１カ月50万円くらいの利用料金は大丈夫です」と言われている。

●現在利用しているサービス

訪問介護（毎日３回、朝昼夕）：食事準備、家事、散歩介助、通院介助

訪問看護（週３回）：入浴介助

リハビリテーション（週３回）：病院にて（医療保険）

配食サービス（週３回・昼食）

●健康状態

高血圧、糖尿病の既往があるが、現在は糖尿病の内服治療のみで落ち着いている。

●ＡＤＬ

短下肢装具装着にて杖歩行。ゆっくりだが階段昇降も可能。訪問看護により週３回入浴している。洗身は背中など一部介助だが、自分でできることでも積極的にはしない。依存性が強い。独居になってからは、更衣は入浴時のみで、朝晩の着替えはしていない。

●ＩＡＤＬ

ほとんど自分ではやらない。

●認知

失語症もあり、どのくらいの認知能力があるのかわからないことがある（電話がかけられない。短期記憶がはっきりしないことがある）。

●コミュニケーション能力

失語症あり。しゃべる言葉は単語が多い。文章になるとつまづき、「まあいい」「死にたい」と言われる。気に入らないことがあると、絶対に喋らない。鬼瓦のような顔で無視し続ける。

●社会とのかかわり

ひとり暮らしになる前は、会社にも行っていたが、今はまったく行っていない。外出はリハビリと通院のときのみ。会社のほうも「お金は出すから介護はヘルパーさんでやってください」と、本人とのかかわりに対して消極的。生活費を届ける時のみ、自宅を訪問する。

●排尿・排便

日中、夜間ともにトイレにて排泄。

●口腔衛生

ヘルパーが声かけをして、歯磨きをする。

●食事摂取

自力摂取可能。献立の好き嫌いが多く、配食サービスを最近中止した。今は寿司を出前で取ったりしている。

●介護力

まったくない。現在はサービスのみで対応している。会社はあまりかかわりたくない様子。親族・知人は、本人の依存的性格、わがままに対して飽き飽きしている。

●居住環境

持ち家２階建て。２階部分は現在は使用していない。退院時に、トイレに手すりを設置し

た。住宅ローンがある。

●その他

会社役員という立場で会社から給料としてでるお金を、サービス利用料として使っている。日常の生活費も、会社の総務が管理している。

ケース検討会

野中　では、これからNさんにとって、どんな支援が考えられるのかを一緒に考えていきたいと思います。まずは、Yさんからの報告に加えてどんな情報があるとよいか、自分の価値観を交えずに質問してください。見立てのための情報がある程度そろったところで、プランニングに移りたいと思います。

それでは、質問をどうぞ。

ケースの全体像をつかむ（見立て編）

ADLについて

発言　もう少しご本人ができることとできないことを教えていただきたいのですが、食事についてはいかがでしょう。

Yさん　食事は自力で摂取できます。朝はヘルパーさんが調理をし、昼は寿司を取ったり、コンビニのお弁当を食べています。夕食はその日の気分次第でヘルパーさんが作るか、お弁当を買いに行ってもらっています。

発言　身体全般の健康状態はいかがですか。

Yさん　詳しいデータは見ていませんが、月に1回は血液検査を受けています。

発言　受診の同行は誰がしているのですか？

Yさん　ヘルパーさんです。タクシーで20分ほどのクリニックに一緒に行っています。

発言　衣服の着脱は自分でできるのですか。

Yさん　はい。といっても、実際には週に3回、入浴介助のときに着替えるだけですが。

発言　夜寝るときも着替えないのですか？

Yさん　はい。ポロシャツと綿のズボンという格好が多いのですが、そのまま寝ています。

発言　装具は寝る時ははずすのですか？

Yさん　いえ、トイレに間に合わないということで、つけたまま寝ていらっしゃいます。昼間、テレビを観ている時にははずしていますが。

発言　右片麻痺はどの程度の麻痺ですか？

Yさん　完全麻痺です。

発言　失語症は、どのタイプの失語症ですか。

Yさん　詳しいことはわかりません。単語程度は話すことはできますが、長いセンテンスは難しいです。

野中　あなた自身が判断できる必要はありません。ただ、失語症にも運動性失語や感覚性失語などさまざまなタイプがありますし、それによって援助の仕方も変わってきます。失語症に詳しい人に聞けばいいんですよ。誰がよく知っていますか？

Yさん　ドクターでしょうか。

野中　そう。ドクターに聞くのが一番ですね。

発言　リハビリに週3回行っているということですが、ＳＴはいらっしゃるのですか。

Yさん　はい。リハビリには、ＰＴ・ＯＴ・ＳＴがいます。

野中　じゃあ、ＳＴの判断も聞けますね。聞いていますか？

Yさん　いえ。リハビリの状況は細かくは聞いていません。

野中　リハビリ職は専門家としてのアセスメントとプランニングを必ず行っています。ケアマネジャーとしては、その情報もふまえないとＮさんの生活全般にわたるケアマネジメントはできませんよね。だから、当然リハビリ職のアセスメント情報とプランニング内容について聞いていいんですよ。

Yさん　はい、わかりました。

生活歴について

発言　サラリーマンから独立して会社を興したということですが、いつ頃独立し、どんな業種でどのくらいの規模の会社なのですか。

Yさん　いつ頃独立したのかは、具体的には聞けていません。業種としては、ビルの警備などを行う会社で、ご本人自身、高校卒業後大手の警備会社に入って、一生懸命仕事をして独立されたそうです。会社の規模は、従業員数などはわかりませんが、受付に6人ぐらい女性がいて、5階建ての自社ビルですので、それなりの規模なのではないかと思います。現在は、信頼

できる方に社長職を譲り、ご自身は会長という立場でお給料をもらっています。

発言　事例の報告を聞いていると、孤独な生活をしているように感じられたのですが、会社関係以外の友達などはいないのでしょうか。

Yさん　ふだんの話のなかではでてきません。

野中　漠然と聞いてもでてこないと思いますよ。こちらから意図的にきちんと質問をしないと。「倒れたときに電話をして、すぐに来てくれそうな人は誰ですか？」という聞き方をすれば、答えやすいでしょう。

Yさん　たしかに。そういう聞き方はしていませんでした。

発言　ご本人の趣味は何でしょう。

Yさん　倒れる前は、模型の飛行機を作って飛ばしたり、バイクとお酒が好きで、会社の方なんかと毎日のように飲んでいたそうです。

野中　もう少し詳しくわかりますか。飛行機のタイプやお酒の種類、飲み方など。

Yさん　よくラジコンのヘリコプターを作っていたそうです。お酒は、当時のことはわかりま

せんが、今はビールを時々飲んでいます。

野中　時々、というのは情報としては曖昧ですね。具体的にわかりますか？

Ｙさん　週に１回、中瓶２本を飲んでいます。

発言　なぜ週に１回なのですか？

Ｙさん　あるヘルパーさんが入ったときにだけ飲むんです。

野中　ヘルパーも一緒に飲んでいるの？

Ｙさん　そうではありません（笑）。

野中　どんなヘルパーさんですか？

Ｙさん　まだ20代の若い方です。

野中　美形？

Ｙさん　はい。

野中　なるほど。わかる気はしますね（笑）。ほかにはどうでしょう。

発言　現在、お子さんとの関係はどうなっているのですか？

Ｙさん　別れた奥さんとの間に２人子どもがいますが、今は没交渉のようです。弟さんのほうが先に結婚し、お姉さんは最近結婚されました。離婚後、一緒に住んでいた内縁の妻にも子どもが一人いましたが、ご本人が退院してからまもなく出て行き、その後は交渉はないようです。

野中　子どもに関する情報は、どこから入手したのですか？

Ｙさん　本人が病院から退院し、内縁の妻が出て行った後、妹さんが同居していた時期があります。その時に妹さんからお聞きしました。

介護の状況

野中　妹さんが同居していたことがあるのですか。そのあたりの経緯を教えてください。

Ｙさん　実は、妹さんが同居していた時期には、車で20分くらいのところに住んでいる５つ年上のお兄さんも通いで介護に来ていました。食事の支度や通院などを妹さんが担当し、お兄さんは夕方に来て夜の介護を行い、翌朝帰るという生活でした。

発言　お二人は仕事はしていないのですか？

Ｙさん　お兄さんは定年退職をされていました。妹さんは建築関係の会社で事務職をしていましたが、介護をするに当たって仕事を辞めています。今は無職です。

野中　お兄さんの仕事は？

Ｙさん　会社員です。

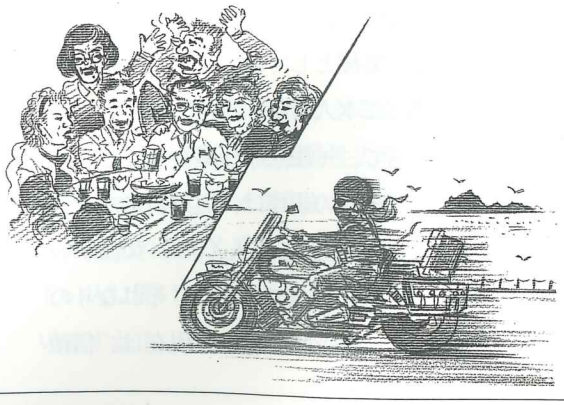
野中　どんな会社？　福祉用具会社？（笑）

Ｙさん　そこまではつかめていません。

野中　何が社会資源として使えるかわかりませんからね。せっかく親族の情報を押さえるのであれば、会社員でとめるのではなくて、どんな会社なのかまで聞いておくことが大事です。

Ｙさん　はい、わかりました。

野中　それで、妹さんとお兄さんはどうしたのですか？



Yさん　途中で3人の関係が最悪になって、妹さんやお兄さんも「もう面倒をみきれない」と言うし、本人も「ここにはいたくない」ということで、老健に入ることになったのです。

発言　妹さんたちが「面倒をみきれない」と言うようになったのは、なぜですか。

Yさん　妹さんは「自分がどれだけ一生懸命尽くしても、感謝の言葉がない」とか「あの人は思いやりがない」、それと「リハビリ意欲もやる気もない」とよく言われていました。

発言　そうすると、老健の退所と同時にひとり暮らしが始まったのですか。

Yさん　それが、老健の退所後、もう一人介護をしていた方がいらっしゃいます。

発言　どんな方ですか？

Yさん　ご本人が老健に入所している間に、ごきょうだいや会社の方と退所後の介護体制を相談する予定だったのですが、なかなか話し合いの日程調整がつかないでいる間に、ある日突然老健の相談員から「明日退所ですので、よろしくお願いします」と電話がかかってきたのです。まだ話し合いもしていないし、どうしようと思っていたら、会社の方が、Nさんの行きつけだったスナックのママさんの弟さんという方をつれてきて、「この方が一緒に住んで面倒をみてくれます」ということになったのです。

野中　なんだか不思議な話ですが（笑）、それだけNさんには魅力があるのでしょうね。それで、その弟さんはどうなったのですか？

Yさん　4カ月後にいなくなりました。

野中　その後、独居になったということですね。

Yさん　そうです。

発言　その方はなぜ出て行ったのでしょう。

Yさん　そこが私も一番知りたいところなのですが、ご本人にそのことを聞いてもかたくなに黙って口を開いてくれません。ただ、一緒に住んで1、2カ月経った頃から、訪問するたびにその方が「完全に無視されるので嫌な思いをしている」とグチを言っていました。そういう気持ちが積み重なって、ある日突然出て行ってしまったのだと思います。

野中　これまでにかかわっていた妹さんやお兄さん、そのスナックのママの弟には、連絡はとれるのですか？

Yさん　はい、連絡先はわかります。

野中　じゃあ、まだ社会資源としては残っていると考えてもいいですね。

ほかにはいかがでしょう。

本人の思い

発言　今現在、ご本人はどんな気持ちで毎日を過ごしているのでしょう。

Yさん　「死にたい」とよくおっしゃいます。

野中　それはどこまで本気で言っているのでしょうね。同じ「死にたい」でも、いろいろありますからね。私なんか、風邪を引いただけでも「死にたい」って言いますからね（笑）。

Yさん　訪問看護師やヘルパーさんも気にしてくれていて、いちど看護師が「じゃあ、どうやって死ぬの？」と聞いたときには、黙りこくってしまったそうです。それと、例の若いヘルパーさんが「そんなことを言うなら、私はここに

は来ません」と言ったら、そのヘルパーさんには言わなくなったそうです。

野中　週1回来てくれるのをささやかな楽しみにして生きてるのに、来てくれなくなったら困っちゃうものね（笑）。つまり、その程度の「死にたい」だということでしょうね。

発言　経済面については、住宅ローンもまだ残っているようですが、月々の会社からの給料などでやっていけるということでしょうか。

Yさん　ローンの額などは把握していませんが、周囲の方からも経済的な面での心配はお聞きしたことがありません。

発言　ご本人は、ご自分の身体の状況についてどのように理解しているのでしょう。

Yさん　お医者さんからどんな説明を受けているのかはわかりません。ただ、ご本人は自分の手足がいつか動くようになると思っているようです。ヘルパーさんや看護師さんに「今年の終わりには手が動くようになるだろうか」とか「いつ頃歩けるようになるかな」といった話をしているそうです。

野中　そうですか。少なくとも今どきの医者は、患者さんに対してはきちんと説明をしているはずですよ。わかりやすく説明できているかどうかは別として、説明をして、それを記録に残しています。そうしないと、裁判になったときに負けてしまいますからね。だけど、どうも本人には伝わっていない節があるわけですね。

発言　その点についてですが、たとえご本人は聞いていても、認めたくないという気持ちが強いということは考えられないでしょうか。この方はたたき上げで会社を興して、まだまだ働き盛りの年齢です。それだけに、今の身体の状態を認めるのは難しいのではないでしょうか。

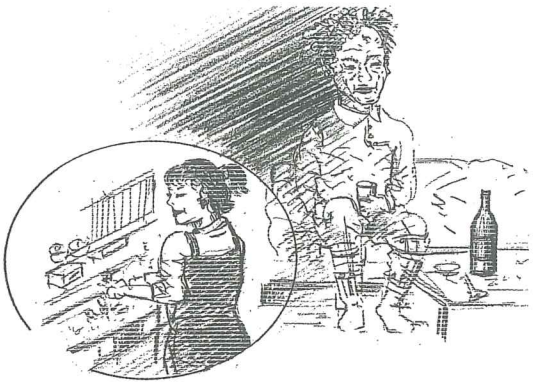
野中　とても大事なところに着目しましたね。今おっしゃったことは、おそらくこのケースの鍵でしょうね。Nさんは高校卒業後、一生懸命仕事をして独立し、厳しい競争を勝ち抜いて5階建てのビルを構えるまでに会社を大きくした。これだけでも、たいしたことです。単なる気むずかし屋やひねくれ屋にできることではありません。プライベートではラジコンを作り、バイクに乗り、毎晩のように酒を楽しむ。残念ながら最初の家庭生活はうまくいかなかったけれど、その後も内縁の妻を得ている。非常にエネルギッシュな、自信に満ちた人物像が浮かんできますよね。そういう、まだまだこれからという壮年の男性が、突然倒れて片麻痺になり、言語機能も損なってしまった。これはちょっとやそっとの落胆ではありません。70歳や80歳の人の脳出血とは話が違います。

こういうNさんの全体像を頭に入れた上で、これからどうやってかかわっていけばよいか、プランニングを考えていきましょう。

具体的な対応策を考える（手立て編）

野中　これからNさんを支えていく上で、どんな手立てが考えられるでしょう。

発言　会社の経営状況やご本人の経済状況を具体的に確認する必要があるのではないかと思います。この先も安定して給料がでるのかどうか



も気にかかります。

野中　会社として金銭や介助の面でどこまでNさんにかかわれるのか、確認するということですね。ほかにはどうでしょう。

発言　ご本人が自分の本当の思いを言えていない気がします。専門家がきちんと思いを聞くことが大事ではないでしょうか。

野中　誰が聞くのがいいと思いますか。

発言　Nさんが気に入っているヘルパーさんではどうでしょう。

野中　そうですね。適任かもしれませんね。

発言　ご本人が自分でどこまでできて、どの部分を援助すればよいのか、もう一度きっちりと整理することが必要ではないかと思いました。

野中　大切ですね。

発言　医療やリハチームとの連携をとる。

野中　そう。絶対に必要です。彼らのアセスメントとプランニングをケアマネは共有しなければいけません。それと、リハビリ職がNさんに身体の状態をどう説明しているのかを聞くことも重要ですよ。

Yさん　はい。

発言　これまでNさんにかかわった人たちが、もう一度かかわれる可能性があるかを調べる。

野中　オールキャスト総出演ですね（笑）。先ほども少しふれましたが、この方たちは、まだ可能性が残っているかもしれない大切な社会資源です。どこまでならかかわることができて、何があるとダメなのか、お一人ずつ話を聞いてもいいかもしれませんね。お子さんはかかわれる可能性はないのですか？

Yさん　実は、娘さんが結婚をする前に会いに来たのですが、Nさんが「会いたくない」と言って拒否されたということがあります。

野中　どうして拒否したのかな。

Yさん　おそらく、麻痺の身体を見られたくないという気持ちからだと思います。

野中　なぜ、Nさんはそう思ったのかな。娘さんを愛しているからこそ、見られたくないんじゃないですか。本当は、会いたくてたまらないんじゃないでしょうか。

Yさん　……そうかもしれません。

野中　だったら、会わせる方向にもっていきたいですよね。娘さんは「会いたい」と言っているんですよね。

Yさん　はい。「本当は結婚式にも出てほしかった」とおっしゃっていました。

野中　だったら、会わせればいいんですよ。「お父さん、来ちゃった」でいいんです。

Yさん　なるほど（笑）。

野中　ほかにはいかがでしょう。

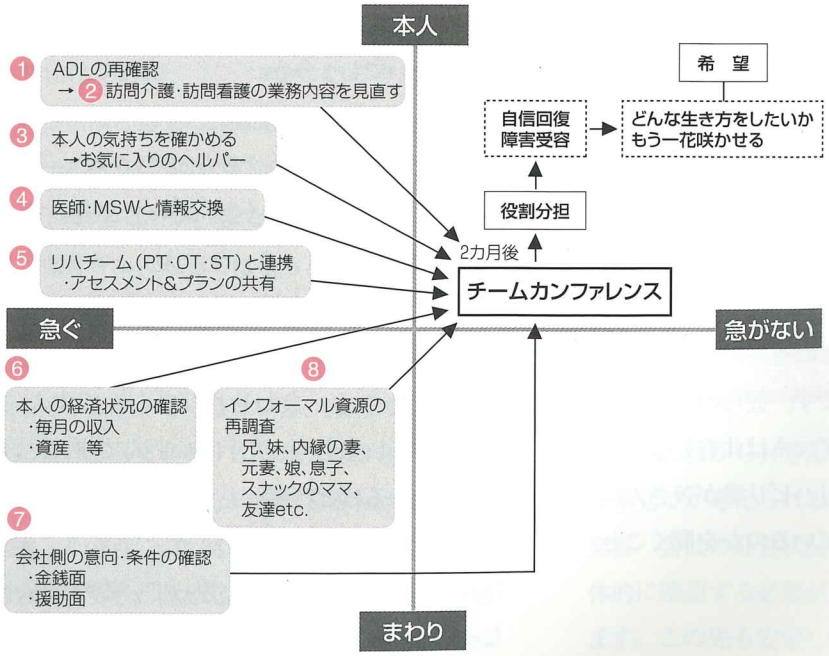
発言　ご本人がまだ治ると思っているのなら、じゃあ、治ったら何がしたいのか、将来の希望

を聞くというのはどうでしょう。

野中　いいですね。「完全には治らない」なんて、ケアマネが言う必要はありません。それは医療職に任せればいいんです。これからどんな生き方がしたいのか、たとえ夢のようなことであっても希望を一緒に描くことのほうが数段大切です。それがケアマネジャーの仕事です。

だいたいこんなところでしょうか。まだいろいろな面で情報が足りないので、まずは今出てきた点を確認し、その上で一度チームカンファレンスを開きたいですね。そこで情報を持ち寄り、役割分担を見直して、チームとしての援助を仕切り直ししていけばいいんじゃないでしょうか。そして、最終目標は、この59歳の男性に自信を回復してもらい、自分自身の人生を生きて、もう一花咲かせられるよう支援していくことでしょうね。いかがですか、Yさん。

Yさん　はい。カンファレンスまでは開けると思うのですが、自信を回復してもらうのはなかなか……。

野中　何もケアマネジャーがすべて自分で解決しようとする必要はないんですよ。ケアマネジャーは、いわば「真珠のネックレスの紐」のような存在です。要は専門職という真珠に輝いてもらえばいいんです。これだけかかわっている人がいれば、Nさんに自信を回復させるだけの力をもっている人が必ずいますよ。娘さんが「お父さん頑張って」って一言かけるだけで立ち直っちゃうかもしれないし、元妻がどこからともなく現れて「アンタ、何やってんのよ！」と元気づけてくれるかもしれない（笑）。Yさんは、ケアマネジャーとしてできるだけのことをして、Nさんの人生のドラマを一緒に楽しみながら援助をしていけばいいんです。それが援助職のおもしろさでもあるわけですから。そんなに深刻になる必要はありませんよ。

Yさん　わかりました。そういっていただけて気が楽になりました。今日はいろいろとありがとうございました。